

# 多御少女の房中術に関する医学的検証

巖 善 昭

日本医史学雑誌第四十八巻第二号 平成十三年 四月 五日受付  
平成十四年六月二十日発行 平成十三年十二月二十二日受理

〔要旨〕『集驗方』等に収録されている童女の性交で多発した膕の損傷や出血、陰部の痛み等の症状に對する応急措置や処方等から、古代中国において童女や少女を性交相手にさせ、己の健康増進や不老長寿を求める多御少女房中術が唐代まで公に行われていた事実は明らかである。有名な『千金要方』も裕福な人々にそれを勧めたのである。多御少女房中術の始まりは漢武帝の時代に溯ると推測され、宋代では表の舞台からその姿が消えたように見えるが、医学書籍からの批判や内丹修練に関わる道教經典に使われる隠語より、明清社会の裏面では途切れなく行われていたことは否定できない。発育成長中の童女を性の相手として房中術に強要することは批判せざるを得ない。

キーワード——多御少女房中術、童女、好女、膕の損傷、膕の出血

## 一、はじめに

房中術は健康増進、不老長寿を求める中国の特有な文化の一つとして、戦国中期の南方地方に形成されたと推測され

ているが、『漢書・芸文志』方伎略において医經と經方に次いで一大の方技と認められ、臨床医療にも用いられていた。<sup>(1)</sup>その後様々な形で展開され、還精補脳術や黄赤混氣道術等のような房中術も一時世に流行していたが、南北朝に入つて北方の新天師道、南方の上清派及び仏教側からの激しい批判、さらに隋唐期の房中術を文芸化した展開<sup>(3)</sup>によって、医学としての信頼性が急速に低下し、宋代以降ついに社会の表舞台からその姿を消し、古代房中術の専門著作もほとんど遺失してしまつた。二十世紀中頃、『医心方』房内篇により、いくつかの房中術専門書が復元された。<sup>(4)</sup>

一方、『医心方』房内篇に引かれた『彭祖經』などの書籍の内容から、古代房中術の展開のなかで多御少女<sup>(6)</sup>という房中術が行われていたらしい。多御少女房中術とは、一度の性行為において多数の童女や未婚処女を性的パートナーとして用い、天眞爛漫な少女からより多くの陰気を汲み取り、己の元気を補強するもので、それによって健康を増進し老化を遅らせ、寿命を延長することができる<sup>(5)</sup>と考えられていたものであろう。しかし、齊の大夫褚澄の伝えとして『三元延寿参贊書』に「未笄の女は天癸始めて至り、己に男色に近づき、陰氣早泄し、未完して傷つく」「女はただ早く陰破れ、則ち其の血脈を傷つく」とみえているように、それは早婚が女性に与えた弊害について言及したものであるが、同様に性交を強要された童女に加えられた被害でもあると言えよう。それによつて発育の未熟な少女の性器が損傷されるのみならず、将来にわたつて精神的後遺症を含む様々な病気を引き起こす可能性も秘められていると考えられる。

本論では、この利己を極め、謎に満ちた房中術はいつ、どのように形成されたか、童女や少女たちにどのような被害をもたらしたか、及びそれらに関わる歴史背景や社会文化などを考察しながら、古代の医学文献資料からその被害の痕跡を検出し、医学の立場から検証を行うことを試みる。

## 二、多御少女房中術の由来

現存する古代房中術の文献資料を検討すると、多御少女房中術を説くものは『彭祖經』から始まると見られている。

『神仙伝』によれば、黄山君は彭祖から房中術を修得した上で、それをまとめて『彭祖経』として書き残したという。『彭祖経』という書名は『抱朴子・内篇』遐覽篇に見られると同時に、極言篇で「『彭祖経』云」といったような引用文も多数確認されるので、文献上『彭祖経』の存在は紛れない事実である。遐覽篇に書かれた道教図書目録の時期はおよそ四世紀中期だと言われているので、『彭祖経』のような書物は遅くとも四世紀の前期、若しくは三世紀の後期から世に出現したと考えられる。

『抱朴子』微旨篇では「玄素は之を水火に論う、水火は人を殺し、又た人を生かし、能く用うると能わざるに在るのみ。大都其の要法を知り、女を多く御すれば善を益す。如し其の道を知らず之を用うれば、一兩人死を速むるに足るのみ。彭祖の法、最も其の要たる者なり、其の他の経は煩勞多くして行い難く、其の益と為るものは必ずしも其の書に如かず」と述べているが、多御女子房中術を中心にして展開した『彭祖経』は「玄女経」「素女経」の要領をよくつかみとり、しかも書かれた内容の読みやすさも評価された。『列仙伝』女几伝の讚にも「玄素には要有り、近く諸れを身に取り、彭祖之を得、以て五巻を陳す」とみえ、『彭祖経』は当時の人々の目には特別な房中術専門書ではなく、「玄女経」や「素女経」を基づいて、多御少女を中心にして再構成された書物と映ったであろう。房内篇に収録された各書の「彭祖曰」という条文を総合してみると、多御少女房中術を説くほかに、求子方法、強壯治療、房中禁忌などにも及んでいるが、該書の現れが後漢後期以来の礼教的倫理、とりわけ孝観念の衰微、変容と相即不離な関係で展開することも指摘されている。

一方、『医心方』房内篇によれば、多御少女房中術が不老長寿に役立つ方術と力説されるとき、二つのことが強調されている。一つは黄帝が千二百人の女性と交わることよって神仙となり、竜に乗って天に昇ったという伝説である。もう一つは多忙な国務に励む君主の体力を支えるものとして、後宮に集められる無数の少女との交わりによって陰氣が得られると伝えられている。その真面目に国政を遂行する帝王が黄帝なのか否かははっきりと言明されていないが、多御少

女房中術の形成には古代の帝王が欠かせないモデルとして存在したと考えられる。

戦国時代の帝王たちは後宮に名目のある妃を配置する以外、すでに多数の女性を幽禁するようになり、斉国の襄公が数千人の妾を娶ったことに対して彼の子孫からも非難された。<sup>10</sup>『漢書』張良伝によると、秦始皇帝の後宮に集められた女子の数は千人にもものぼっていたという。美女を無制限に集めることは帝王のみでなく、貴族や官僚にも拡がっていた。秦漢両朝にわたって重臣とされ、前漢初期の丞相にもなった張蒼は、娶った妻や妾の人数が数百名にもものぼった。しかも、妊娠した者に対して再び交わることをしなかつたとも言われている（『漢書』張蒼伝）。漢武帝の後宮に数千人の美女が納められ、彼の伯父、武安侯田蚡も百人以上の妾をもつたという（『漢書』田蚡伝）。貢禹は皇帝への諫言書に漢武帝のいき過ぎた行為及び貴族社会に与えた悪影響に対して痛烈に批判した。<sup>11</sup>彼は漢宣帝（前七三〜四九）に博士に徴されたのち、涼州の刺史となったが、病氣のために自ら官職を辞めた。賢明、かつ正直な人柄で漢元帝（前四八）が即位すると再び諫大夫に任命されたので、彼の諫言内容の真实性は極めて高いと考えられる。

貢禹の諫書には極めて興味深いことが秘められている。帝王が美しい妃や宮女を選ぶのは当然なことと思われるが、漢武帝と孝宣帝に対してそれぞれ「好女を取る」と「女を取る」といったような使い分けの言葉が選択されたことから、明らかに漢武帝の後宮に送られた女子に対して何らかの特別な選抜条件を加えたと考えられる。「好女」という言葉は『穆天子伝』巻二（晋・郭璞注、平津館叢書本）に「好女を天子に献げる」と見えているが、「悪女」とともに古くから房中術の専門用語として使われていた。『医心方』房内篇に設けている三十項目にも「好女」と「悪女」とがあり、主に『玉房秘訣』や『太清経』からの引用文を充てている。好女の主な条件としては、まず未婚の少女であり、次は豊満な身体、さらにその陰部及び腋下に毛がまだ生えていない者と記されている。<sup>12</sup>「人生の宿命、運の盛衰、寿命の長短、富貴と貧賤を皆知る」（金丹篇）と述べる『太清経』は、『抱朴子』遐覽篇にも録されているので、その成書年代の下限は後漢後期に求めても問題がないであろう。

ところが、十六歳の若さで即位した漢武帝は七十歳死去まで五十五年間も統治していた。在位期間の長さだけでなく、何事にも意欲を示し、積極的な性格で漢王朝の最も輝かしい時代を築いた。『史記』の「五帝本紀」「孝武本紀」では、黄帝の伝説及び不老不死の神仙なることを切望する漢武帝との関わりが多数伝えられている。彼の人生は黄帝のような神仙になりたい一心で、一所懸命に黄帝の伝承を探し、そして真似したものであると言えよう。彼は房中術に非常に興味をもった者と噂された<sup>(13)</sup>と同時に、処女か否かを確認する守宮液という薬物検査法を用いたとも言われている<sup>(14)</sup>。漢武帝ほど神仙方術にのめり込んだ権力者は、それ以後の中国歴史にも現れていなかったであろう。

### 三、少女性交の医学的検証

女子の第二次性徴の発達はいわゆる思春期で、すなわち八、九歳から徐々に著明になり、十七、八歳までの十年ぐらいかかって性機能が発育、完成するとされているが、日本厚生省の報告によると、昭和六十年の女子の平均初経年齢は昭和十年度の調査より三年も早くなったという<sup>(15)</sup>。とくに現代社会の豊かな食生活とは較べられない古代中国では、「女は二十にして嫁ぐ」(『周礼』)と記されるように、女子の発育成長が現代人より二、三年遅れるとも考えられる。医学の立場からみれば、十五歳以下の童女は肉体と精神とともに発育成長の最中にあるので、その未熟さを完全に無視して性交の相手に強要された場合、精神上の苦痛や傷跡がいうまでもなく、肉体的には生殖器が最も傷つきやすく、膣の損傷、出血や痙攣性疼痛などの症状を引き起こす可能性が十分あると考えられる<sup>(16)</sup>。これらの少女性器の病変に関する古代の臨床治療報告は、多御少女房中術が及ぼした被害の状況、及びその信憑性を裏付ける一つの有力な証にもなるのであろう。

『千金要方』卷三婦人方(中)では、性交を強要された童女が発症した陰部の痛み、膣の外傷や出血などの症状に対して、次のような三つの処方<sup>(17)</sup>が収録され、外用を中心とする応急措置と見受けられる。(一) 釜うらの積煙をゴマ油とまぜて患部に塗る。(二) 青布と髪の毛を焼いた灰を患部に塗る。(三) まゆ糸を焼いた灰を患部に塗る。処方の内容を見た

かぎり、特別な生薬が使われていなかったもので、長い間民間で密かに用いられた治療方法を吸い上げたものであろう。どこでも、誰でも即座に手に入れられるものが薬として使用された点から推測すれば、当時の社会では性交を強要された童女には膣の損傷や出血などの疾患が多発していたと考えられる。また、「小戸嫁痛」といったような陰部の痛みを治療するために二つの処方も記されている。「治小戸嫁痛連日方」は甘草、芍薬、生姜、桂という四種類の生薬からなるもので、「治小戸嫁痛方」は、烏賊骨を焼いた屑を服用する。前者は酒で生薬を煎じるが、後者は酒でその灰をのみこむ。酒を用いるのは、おそらく痙攣の激痛を緩解するためにより強い鎮痛効果が求められ、童女の治療処方にも加えられたのであろう。

『医心方』房内篇「少女痛第二十九」でも童女の性交による膣の損傷や出血などの治療が取りあげられている。『集驗方』から引用された三つの処方は、(一)髪の毛と青布を焼いた灰を患部に塗る。(二)ゴマの油を患部に塗る。(三)葫蘆を切断して釜うらの積煙を擦り取って患部に塗る。『千金要方』の三番目の処方がみられない。それ以外に記されている「治小戸嫁痛方」は、『千金要方』の焼いた烏賊骨の粉末と酒とを用いる外に、又は牛膝と酒からなる煎剤である。唐天宝年間に王焘によって編纂された『外台秘要』の三十四卷婦人篇では、童女の性交による膣の損傷や出血の治療については、『集驗方』より三つの処方が記されているが、房内篇に録された「麻油を以て之を塗る」という処方が見られず、代わりに「鶏冠を割り血を取りて之を塗る」という処置が加えられたのである。それ以外の処方はほとんど『千金要方』から引用したものである。

『集驗方』という書名は『隋書・經籍志』医方類にすでにみえているが、そこには『集驗方』十卷(姚僧垣撰)、姚大夫集驗方<sup>17)</sup>十二卷及び『集驗方』十二卷という三種類が録されている。『外台秘要』に引用された姚僧垣の処方は三二〇と集計された。『周書』『北史』両芸術伝によれば、姚大夫と呼ばれた姚僧垣(四七八〜五八三)は、字を法衛といい、梁の太医正となったのち、北周の太医下大夫に任ぜられた人物であり、豊富な治療経験の臨床家でもある。国家の医療行政

を指導する立場にあつた責任者の著作に童女の性交出血に関する治療方薬が多数公表されたこと、『集驗方』という書名及びその処方直後に「立癒」(『医心方』房内篇)といった治療効果を推奨した言葉から、その病気は当時の上流階級に多発したもののだけではなく、自らの行つた医療活動のなかで、収集した民間療法を試し、それなりの例数を処置した後に得られた効果的な結果とも推測される。

後漢末期の名医張仲景の著書といわれる『金匱要略』は、雑病を中心に論じる稀な臨床医書で、婦人雑病の弁証論治も多く紹介されているが、童女性器の損傷、出血や痛みなどを治療した報告があまり見当たらない。秦漢時期の臨床医療資料が極めて少なく、また現行の『金匱要略』が北宋に再編成されたため、現段階ではそのような臨床報告が原本に存在しなかつたとは言い切れない。戦乱の絶えない魏晋南北朝では、各時期の政府は人口増殖や税収拡大のために相次いで早婚促進の政策を打ち出し、貴族や上流社会の子弟は庶民より若く結婚する傾向があつた。<sup>(18)</sup>しかし、男女ともに未成年者が結婚する場合、性交渉による陰器損傷の発病率は成人の男性によつて行われる多御少女房中術よりずっと低いと考えられる。

一方、『千金要方』では兔の糞、乾漆、鼠の頭骨、雌鶏の肝で調剤する「治陰寛大令窄小方」が記され、これらのもので作られた丸薬を性交する前に腔腔に入れて使用するという。出産などで緩んだ腔腔を再び緊縮させる効果があるらしい。使用した三日目にその効果が現れ始め、十日目から腔腔が著しく小さくなり、五十日後「十五歳の童女の如し」と記されている。このような詳細な治療経過が記録されたので、当時の臨床ではこの丸薬を求める者が多くいたと思われる。これは子孫繁栄を念願するための早婚や妾娶りと異なつて、必要以上に性的快楽を追求し、童女を求める男性の「処女癖」の現れだと言える。裕福な階層では金で「少年未生乳」(『千金要方』)といった童女を買うのに対して、外用薬で「処女癖」を満たすことは庶民層にも拡がっていたであろう。このような唐代の社会風習は、北方少数民族の血統をもつ隋唐権力者の「夷狄」風俗にも関連があるのではないか。<sup>(20)</sup>

ところが、五代十国を経た北宋の初期、宋太宗の勅令で医官陳昭遇、王懷隱らが中心となって、約十年間かけて（太平興国七年（淳化三年）編纂した百巻からなる『太平聖惠方』には、一六七〇門に分類され、「治婦人夢与鬼交通方」「治婦人月水不通無子諸方」「治婦人陰瘡諸方」などのような女性疾患に関する治療方薬が多数収録されているが、性交を強要された童女、ないし女性の陰器損傷、出血や痛みなどを治療する項目及び関連の方薬が一切見当たらないのである。その十八年後、朝廷の勅令で医官陳師文、裴宗元らが薬典『太医局方』を基にして拡充し編集した『校正太平惠民和剂局方』には、「治婦人諸疾」が設けられているが、同様に童女や女性の陰器損傷、出血や痛みなどを治療する方薬が見られない。

政和年間（一一一一～一一二七）に編集された『聖濟総録』は、金人の開封侵入によってその版が奪われたのち、大定年間（一一六一～一一八九）にやっと刊行された。この二百巻からなる大型の医学書では、二万近くの処方が収録されているが、性交を強要された童女、及び女性の陰器損傷、出血や痛みなどを治療する方薬が見当たらないのである。一般の常識から考えれば、ある種類の臨床治療技術は時代発展とともに絶えず更新されるが、より効果的で代わりうる治療方法が見つからないかぎり、臨床医書から消されることは、その病気が長い期間の臨床観察を経て完全に発生しないと確認された後に取るべき措置としか考えられない。童女を含む性交による生殖器の損傷や出血などの治療項目が宋代の三大処方宝典と言われるような医書から突然跡もなく、さっぱりと消されてしまったことは偶然な出来事ではない。房中術の著作と同じ運命を辿ったことは、北宋の程顥程頤兄弟が洛陽で提唱した「餓えて死ぬ事は極めて小く、節を失う事は極めて大い」（『二程遺書』巻二十二）という礼教論議にも深く関わっていたのではないか。<sup>21</sup>

#### 四、むすび

権力と欲望の集中を極めた古代中国君主政治の一つの象徴ともいうべきものは、全国から厳しい選抜条件で数多くの



童女、少女、美女を後宮に集めた歴史である。このような帝王の後宮に納められた無数の好女は、多御少女房中術の形成に欠かせない条件を十二分に満たしたものである。皇位継承者の育成や皇族の繁栄といった大義名分の下で個人の性欲を満たす者が多かったが、黄帝伝説を真似して好女を求めた漢武帝は、神仙の夢をみて現世志向の頂点を極めた見本だといえよう。「漢、武帝頗る方術を好んでより、天下の道芸を懐協するの士、策を負って抵掌し、風に順って屈らざるはなし」(『後漢書』方術列伝)といわれるように、房中術を含む様々な方術を開発した方士たちは彼のもとに献策を行ったと思われるので、漢武帝の時代は多御少女房中術の始まりなのではないかと推測される。

『集驗方』や『千金要方』などを中心にして多数の医学書ないし房中術専門書に収録された、童女の性交で多発する陰部の痛み、膣の損傷や出血などの症状に対する応急措置や処方などから、古代中国において童女や処女を性交の相手にさせ、己の健康増進や不老長寿を求める多御少女房中術が行われていた事実は明らかである。その最盛期を迎えた隋唐の時代では、『千金要方』を著した、指折りの大名医孫思邈も、財力があれば「好女」を選ぶようにと人々に勧めていた。しかし、後世の医家たちは彼の名声を気づかい、多御少女の房中術を提唱する「房中補益」篇を他人の偽託としながら、「理を悖して良を喪う」(『医問棒喝』)ものとして婉曲に批判を行った。

宋代に入って多御少女の房中術を含む房中術は、表の舞台から急速に消滅したように見えるが、社会の裏面では性的技法として房中術の伝授が依然盛んに行われていた。「浪史奇観」や『隋煬帝艷史』などのように性愛を描く数多くの小説にはよく用いられて、一般の人々に案外に分かりやすく理解されたのであろう。それで房中術専門書を刊行する必要性が無くなった一因とも考えられる。明清両代においては、民間に濫用されて生じた問題に対する医学関係者の批判によく示されているが、また道教の分野において、盛んに行われていた内丹修行に関わる經典に使われる隠語からも、多御少女房中術が途切れなく行われていたことは否定できない。さらに現代でも検挙された売春事情からその影響が窺える。時代背景や社会制度の変化によって倫理観や道徳理念も変わることを配慮しても、発育成長中の童女を性の相手と

して房中術に強要することは批判せざるを得ない。

注と引用文献

- (1) 嚴善昭「馬王堆漢墓の房中養生の竹簡についての研究(古代房中術の成立を中心に)」『中国出土資料研究』第五号、五十五頁、二〇〇一
- (2) 嚴善昭「初期道教と黄赤混気房中術」『東方宗教』第九十七号、二頁及び注2、二〇〇一
- (3) 注(2)の四頁、「老子想爾注」では、還精補腦房中術を「世間偽伎」と批判された。房中術を小説として文芸化した唐の張文成の『遊仙窟』は日本でもよく知られている。唐の文学者白行簡が著した『天地陰陽交歡大樂賦』は、房中術を文芸化した最も典型的な作品だと言える。
- (4) 嚴善昭「『医心方』房内篇についての考察」『日本医史学雑誌』第四十七卷、第二号、三十四頁、二〇〇一
- (5) 『玉房秘訣』「彭祖曰、夫男子欲大利益者、得不知道之女為善。又当御童女、顔色亦当如童女、但苦少年耳。若得十四五以上、十八九以下、還甚益佳也」、「彭祖曰、道甚易知、人不能信而行之耳。今君主御万機治天下、必不能備為衆道也。幸多後宮、宜知交接之法。法之要者、在於多御少女而莫數瀉。使人身輕、病氣消除也」及び、『玉房指要』「彭祖曰、黄帝御千二百女而登仙、……知其道者、御女苦不多耳。不必皆須容色妍麗也、但欲得年少未生乳而肌肉者耳、但能得七八人、便大有益也」(『医心方』安政版)
- (6) 『礼記・内則』「女子、……十有五年而笄」や『釈名』釈長幼篇「十五曰童、……女子未笄者、亦称之也」と示される如き、笄とは髪に飾る簪の一種で、成人した女子の記しでもあるので、十五歳以下の未婚処女を童女と呼ぶ。
- (7) この引用文は元代の李鵬飛『三元延寿参贊書』卷一(上海書店版『道藏』卷十八)に録されている。友人葉応和が書いた跋文に「余友李澄心襄尋母数百里外、適母家多難、以藥活二十八人。(中略)然其天性頓悟有言必覺、又心不苟取不倦医、以是活人多也」と言っているので、豊かな臨床経験をもった医家と考えられる。
- (8) 『隋書・経籍志』卷二雜傳の部に「列仙傳讀」三卷、劉向撰醜續孫綽讀」と記されている。福井康順の「『列仙傳』考」(『早稲田大学大学院研究紀要』3、一九五七)にもその讀は東晋の孫綽の作と推測されている。

- (9) 坂出祥伸「彭祖傳説と『彭祖経』」(『中国新発見、科学史資料の研究論考篇』山田慶児編)京都大学人文科学研究所、京都、昭和六十。ペリかん社の出版した『道教と養生思想』(一九九三)に再録。『彭祖経』の成書年代及びその著者らについての推測も行われている。
- (10) 『墨子』辞過篇「当今之君、其蓄私也。大国拘女累千、小国累百」、管子「唯女是崇、九妃六嬪、陳妾数千」
- (11) 『漢書』賈禹伝「至高祖、孝文、孝景皇帝、循古節儉、宮女不過十余、廐馬百余匹余。……武帝之時、又多取好女至数千人、以填後宮。至孝宣帝之時、……取女皆過大度、諸侯妻妾或至数百人、豪富吏民蓄歌者至数十人。是以内多怨女、外多曠夫」
- (12) 『玉房秘訣』「欲御女、須取少年未生乳、多肌肉、絲髮小眼、眼睛白黑分明者、面体濡滑、言語音声調而下者、其四肢百節之骨皆欲令没、肉多而骨不大者、其陰及び腋下不欲令有毛、有毛當令細滑也」及び『太清経』「凡相貴人尊女之法、欲得滑肉弱骨、專心和性、髮澤如漆、面目悦美、陰上無毛、言語声細、孔穴向前、與之交會、終日不勞、務求此女、可以養性延年」(『医心方』安政版)
- (13) 『漢武故事』によると、漢昭帝を生んだ拳夫人は「解黄帝素女之術」と伝えられる以外、東方朔及びその妾である宛若も房中術に長けた者と記されている。現存の『古今逸史』本では著者の名は班固と付けられているが、斉の王儉説(『四庫全書總目提要』)及び晋の葛洪説(『四庫提要弁證』)もある。
- (14) 西晋・張華「蜥蜴或名蝦蟇。以器養之、食以朱砂、体尽赤、所食滿七斤、治搗万杵、以点女子肢体、終身不滅。唯房室事則滅、故号守宮。《伝》云：東方朔語漢武帝、試之有驗」(『博物志』卷四)
- (15) 石浜敦美『セクシュアリテイ入門』メデイカル出版、九頁と四七頁、東京、一九九二
- (16) 『醒世恒言』卷二十三の「金海陵縱欲亡身」に海陵王は少女を強要する時、「竟忘其質之弱、年之小也、此女果不能當、涕泗交下、……女陰中血流不止」といった描写、又は『隋煬帝艷史』第三十一回に描かれた隋煬帝に強要された十三歳の少女月寶の苦痛と恐怖は、実例に基づくものと思えない。
- (17) 小曾戸洋『外台秘要』による古医籍の検討『日本医史学雑誌』第三十巻、第二号(『中国医学古典と日本』) 塙書房、東京、四九四頁)、または啓業書局『中国医学史略』啓業書局有限公司、一四六頁、台北、中華民國七六
- (18) 小曾戸洋『中国医学古典と日本』塙書房、三〇五頁、東京、一九九六

- (19) 晋武帝は「女年十七、父母不嫁者、使長吏配之」(『晋書』武帝紀)と強制的に早婚を實行し、北周武帝は「自今已後、男年十五、女年十三已上、……以時嫁娶」(『周書』武帝紀)と勅令を出した。「今諸王十五、便賜妻別居」(『魏書』高允伝)とも伝えられ、献文帝は十三歳で孝文帝を生み、陳文帝の沈皇后は十歳で後宮に入った。
- (20) 『朱子語類』「唐源流出於夷狄、故閨門失礼之事不以為異」(卷百三十六、歷代三)
- (21) 二程の礼教論議の影響については、清朝初期の『方苞集』に「餓死事小、失節事大」之言、則村農市児皆耳熟焉。自是以後、為男子者、率以婦人之失節為羞而憎且賤之、此婦人之所以自矜奮與」と指摘されている。
- (22) 「或問、『千金方』有房中補益法、可用否? (中略) 窃詳『千金』之意、彼壯年貪縱者、水之体、非向日之靜也。(中略) 若以房中為補、殺人多矣」(朱震亨『格致余論)、「無論其術驗否、當知天地間未有行悖理喪良之事、而反能益壽長生者、其為害道邪說、顯而易見。豈有賢如孫真人、為此害道之邪說哉? 必由好奇之人、摭拾附会以偽託耳。後賢因過信孫真人、遂不辨其偽妄、而反衍之、蓋亦千慮之一失也」(章虛谷『医問棒喝)。
- (23) 「采陰須採產芝田、十五才交二八年、不瘦不肥顏似玉、能紅能白臉如蓮」「以人補人、一夫可度十女矣」(洪基『攝生總要)、「存真擇三三二八眉清目秀之鼎、調養一年之余、候其癸水行潮信准、(中略) 始陰陽交合」陳希夷『房中玄機中萃纂要)。
- (24) 胡震、島崎繼雄『中国人の性事情』サイマル出版社、一〇二頁、東京、一九九二

(京都府立医科大学公衆衛生学)

# A Study of the Sexual Art of Having Intercourse with Several Young Virgins (多御少女房中術) in Traditional Chinese Medicine

Shanzhao YAN

The emergency treatments for the damage and bleeding of the vagina, and the sharp pubic pain of young virgins which were caused occurred by the sexual art (房中術), were recorded in traditional medicine books, such as the “Ji yan fang” (集驗方) and others. It is a fact that in ancient China some people used the sexual art of having intercourse with several young virgins at the same time in order to increase their health and keep perpetual youth and longevity. The famous traditional general-medical book, “qian jin yao fang” (千金要方) recommended that method to rich persons too.

It is supposed that the beginning of the sexual art of having intercourse with several young virgins traces back to the times of Emperor Hanwu (漢武), but it seems to have disappeared from the historical stage in the Song (宋) period. On the other hand, the criticisms from the traditional medicine books and the secret languages of the training of internal alchemy (內丹) used for the Taoist sacred books show that the sexual art of having intercourse with several young virgins was still going on behind the screen in the Ming (明) and Qing (清) periods. Even if we consider the historical changes of ethics and morality, we now cannot but criticize this behavior of abusing juveniles for the sexual art.